南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう

聞

今月の法話

第30回 聴聞日和

名古屋教区第1組　道誠寺　市野　智行

「大道を体解して無上意を発さん」

法座や学習会の折に拝読する三帰依文の一節です。普段、何気なく読んでいますが、ふとした時にこちらの意識が言葉につかまえられる、ということはありませんか。私はこの「体解」という言葉に少し違和感を抱きました。「解」は「わかる、とく」と読みますが、私の日常で「わかる」ために使うのは「体」ではなく、もっぱら「頭」です。三帰依文の言葉を借りれば「頭解」の営みです。しかし三帰依文では「体解」と記されています。体で解く、体で解るとは、一体どのような意味なのでしょうか。

この「体解」について、二つの出来事を通して気づかされたことがあります。

一つは私が小学生の頃の話です。私の生まれ育ったお寺では、月に一度、定例の聞法会が開かれています。「正信偈」のおつとめが終わり、私は大好きなお同行のおばあちゃんの隣で法話の先生を待っていました。そして、先生の開口一番の言葉が「今日は雨ですね。聴聞日和ですね」でした。子どもながらに「雨の日にお寺に来るのは良いことのようだ」と思ったことを覚えています。今のように娯楽がたくさんあるわけではありません。雨をしのげ、近所の顔見知りが集まり、お斎があり、仏法も聴聞できる、お寺に行くには確かに雨の日は最適なのかもしれません。しかし、幼かった私がこの言葉を鮮明に記憶しているのには別の理由があるのです。それは翌年の聞法会での出来事でした。月ごとに先生が決まっていたため、一年経てば同じ先生に会えます。昨年のような雨ではなく、とても暑い日でした。おつとめを終え、いつものおばあちゃんの隣に座って先生を待ちました。そして、先生の最初の一言は「今日は暑いですね。聴聞日和ですね」だったのです。みなさんは、これを聞いて何を感じるでしょうか？　当時の私の心境は「去年は雨で聴聞日和と言っていた。僕はだまされないぞ。なんていいかげんなのだ」です。この「いいかげんな出来事」が「聴聞日和」という言葉とセットとなり、私の記憶に刻まれました。

そして時が過ぎ、もう一つの出来事を通して「聴聞日和」に新たな意味が与えられることになったのです。

それは私が大学院生の頃のことです。ある先生に学習会に誘われましたが、先約があり参加が叶いませんでした。先約のあることを伝えると、先生は一言だけ「市野君、身は一つですよ」とおっしゃったのです。この一言が私にとって「身を置く」とはどういうことなのかを考えるきっかけとなり、さらに「聴聞日和」に少し違った見方があることを教えてくれました。

当たり前のことですが、私たちは一つの身を生きています。身が二つや三つあれば、学習会にも先約にも参加できます。しかし私たちは一つしかない身を生きているのです。だから学習会や勉強会を優先しなければならない、ということではありません。先生の言葉は、どこにいても、何をしていても、そこに一つしかない身を運んでいることの意味を考えてほしい、という私への問いかけだったと思うのです。

そして、あの「聴聞日和」という言葉も、雨や酷暑という天候の良し悪しを言っているわけではなかったのです。雨でも、酷暑でも、雪でも、台風でも、もっと言えば、それぞれの状況や環境をかき分けて、この一つしかない身が本堂（仏法聴聞の場）に運ばれているのです。であるならば、仏法聴聞するうえでこれ以上に相応しい日はありません。そこに身を置いている事実が既に「聴聞日和ですね」なのです。

また「体解」も同じことを教えてくれているのではないでしょうか。三帰依文の内容に話を戻しますが、「体解」には続けて「無上意を発さん」とあります。無上意とは「この上ない意」を意味します。それは最上や最高のこころではなく、比較を超えたこころとも言い換えることができます。私の頭はことあるごとに何かと何かを比べ、まさに物事を「分けて」きました。その「頭解」に生きる私からは、残念ながら無上のこころは発しようがありません。その分ける私に対して、分けることのできない一つの身を据えることを勧め教えるのが「体解」なのでしょう。

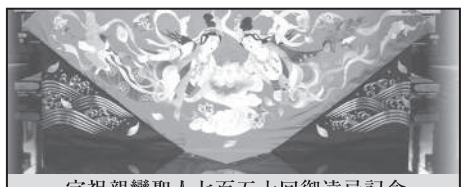
さて、いよいよ宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要が厳修されます。単なる一過性のイベントとしてではなく、「今日は慶讃法要ですね。今日も聴聞日和ですね」と、共に無上意を発さん体解の場としてお迎えしたいものです。

「仏法は、聴聞にきわまることなり」（「蓮如上人御一代記聞書」）と教えられているように、真宗門徒は昔から仏法聴聞を大切にしてきました。日々の生活の中で仏さまの教えを聞いていただくことを願いに、毎月一話ずつ掲載します。

3月8日発売
お釈迦さまの教えとともにある植物のみずみずしい世界へ

仏教ゆかりの植物図鑑
松下俊英（文）　大島加奈子（絵）
B5変形判　80頁　定価：1,210円（税込）
蓮華や菩提樹をはじめ、
仏典に登場する様々な植物たち。
そんな植物の名前の由来や物語を、
お釈迦さまの生涯をたどりながら、
色彩豊かな絵とともに紹介する1冊。

ご注文お問い合わせは　東本願寺出版 HIGASHI-HONGANJI PUBLISHING　TEL：075-371-9189
詳しい書籍情報は　東本願寺出版　検索



宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念
紅地天人之図総手刺繍御打敷謹納
〒600-8159　京都市下京区烏丸通東本願寺前
TEL フリーダイヤル　0120-07-6391
FAX フリーダイヤル　0120-34-2816
https://shibata-houiten.com/
（Webカタログ掲載・商品動画配信中）
@SHIBATAHOUITEN
真宗大谷派 東本願寺御用達　京法衣事業協同組合加盟店
株式会社 柴田法衣店

OPEN CAMPUS 3/19日

大学説明会	大谷大学の説明と入試制度についてお伝えします。
ミニ講義	全学部・学科のミニ講義を開催。大学生の学びを体験できます。
個別相談	大学についての様々な質問に、先生・職員・学生がお答えします。
キャンパス見学ツアー	大人気の在学生による施設見学ツアーです!!

午前の部　10:00-13:00（受付時間 9:30～）
▼詳細はこちら
午後の部　13:40-16:30（受付時間 13:00～）
要事前申込　※午前午後とも同じ内容です
お問い合わせ ： 入学センター
〒603-8143 京都市北区小山上総町
TEL：075-411-8114(直通)
E-mail：nyushi-c@sec.otani.ac.jp
Be Real 寄りそう知性　大谷大学